

栄光

説教

『平和があるように』

ヨハネによる福音書20章19節〜23節

東京神学大学教授 長山 道

説教・「平和があるように」長山道教授……1
特集・伝えたい御言葉……2
説教・「語り続ける」岸俊彦牧師……5
追悼・村田徳子姉……6
西南支区役員研修会報告……6
墓前礼拝報告……7
長老のファイル……7
牧師の書斎から……8

弟子たちはユダヤ人を恐れ、閉じこもっていました。自分たちも逮捕されるかもしれませんから。主イエスを裏切ったことを後悔しつつ、それでもなおユダヤ人を恐れているのは、自分でもどうしようもない弱さを思い知らされる経験です。

ですから弟子たちはユダヤ人だけでなく、主イエスにも会いたくなかったはずです。しかし、戸に鍵をかけておいたのに、主イエスが来て弟子たちの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」（ヨハネ20・19）と言われました。そこで弟子たちは初めて、「主を見て喜」びました（同20）。主イエスから身を隠していた弟子たちに、主イエスの方から赦しと和解

の平安を与えてくださいました。それどころか、弟子たちはその場で即座に派遣され、罪の赦しの権能さえ与えられました。

イエス・キリストの復活は、信仰の最も大切な中心でありながら、どこか難しいものです。単に弟子たちが嘘をついたのではないかと言う人もいます。自分たちの先生が死んでしまつて、これまでの活動が失敗に終わるのをどうしても認められなくて、弟子たちがどっちあげを言い広めたのだろうか。しかしこれでは説明がつかないことがひとつあります。それは、なぜキリスト教が成立したのか、そして今も続いているのかということですが、もしその程度の嘘であれば、弟子たちはその後の迫害に

耐えられなかったに違いありません。しかし彼らの多くは、今度は逃げ出すことなく、殉教の死を遂げたと伝えられています。ということは、弟子たちをすっかり変えてしまふ何かが起こつたはずで、もし主イエス・キリストの復活という出来事を合理的に説明しようとするならば、それが何なのかも明らかにしなければなりません。

それはおそらく、復活のキリストとの出会いではないでしょう。復活そのものを見た人はいませんが、復活された主イエス・キリストに出会った人々について、聖書は多くを記しています。マグダラのマリアも弟子たちも復活の主イエスに出会いました。パウロによると、その後500人以上が復活のキリストに出会つて、そのほとんどは当時まだ生きていたのですから（1コリント15・6）、この出会いを証言していたと思われれます。そしてパウロ自身もキリストと出会いました（使徒9・3〜6）。復活のキリストに出会った人々の中には、もともと主イエスを信じていた人も、パウロのようにキリストに反対して迫害する

側だった人もいました。いずれにしても、復活のキリストと出会った人は、信じる者へと変えられました。マグダラのマリアは悲しむ者から喜ぶ者に、主の復活を伝える者になりました。弟子たちは裏切る者から殉教を恐れない者とされました。このように、死と恐れへの勝利の力をもつてキリスト教は始まり、今日まで続くことになりました。

その意味ではわたくしたちもまた、復活のキリストに出会った者です。それぞれ特別な経緯を辿つて、信じる者へと変えられたからです。「平和があるように」という御声を聴きました。神の愛と赦しの霊を受け、復活のキリストの霊を受けて、主を証して宣べ伝える務めを思いがけず託されました。復活を説明することは難しくいかもしれません。しかしここに教会という信仰者の群れがあることに、わたくしたち自身に、今日も復活のキリストの霊の力が現れて、目に見える仕方では証しされています。

伝えたい御言葉



最初のペンテコステの日

イエス様の弟子たちは聖霊に満たされ

様々な国の言葉で御言葉を語り始めました。

あなたが友人や家族に

伝えたい御言葉は何ですか。



聖書の恵み

桜岡理代

私の好きな聖句は詩編23篇です。それも格調ある文語訳が心に響きます。先人たちの詩が今の時代にも心に沁みるのは、主によって与えられる平安、信頼と喜びがあるからでしょう。

詩編23篇（文語訳）

主はわが牧者なり

われ乏しきことあらじ

主はわれを緑の野にふさせ

いこいの汀にともないたもう。

（中略）

わが世にあらんかぎりは

かならず恵みと憐みと

我にそいきたらん

われはとこしえに

主の宮にすまん

40年前姑の臨終の時、枕辺で読まれたこの聖句を聞いた時、本当に母の生涯がみ心になつた恵みの歩みであったことを思い、心から慰められました。それからは自分もこの詩を振りどころとした歩

みを願うようになりました。

子どもの頃は日曜学校でイエスさまのたとえ話や、クリスマス物語を聞きました。ミッシヨンスクールだった中学、高校では自分の聖書を開いて毎朝の礼拝で読みました。社会人の間は、日曜日は山や海へと遊びに行き、教会生活がおろそかになりましたが。

結婚相手がクリスチャンホームだったことが幸いでした。同居5年間は、毎朝食事前家庭礼拝。父が聖書を読み、祈りました。夫はまだ洗礼を受けていませんでしたが、良い家庭環境にあったことは私の力になったと思います。教会生活も充実して続いているのは感謝です。今ナオミ会ではルカによる福音書でイエス様の生涯を新たな思いで聞いています。特にルカは4つの賛歌をしっています。が、後世の音楽家たちのミサ曲に歌われていることを改めて知り、嬉しいことでした。

五旬節の日、弟子たちは聖霊に満たされ、様々な国の言葉でみ言葉を語り始めた、とあり、それから延々と日本の今の私たちに届いている恵みに感謝です。

私が聞いた御言葉

鈴木恵子

子どもの頃、教会や学校で小さなカードをいただきました。「光の子らしく歩きなさい」「私はぶどうの木 あなたがたはその枝である」。日曜学校(CS)や教室の友だちに囲まれた小さな交わりの中で聞いた御言葉でした。

小学校高学年になると詩編23編を暗唱しました。「宴をもうけ」「汝のしもと」「乏しきこと」今思うと難しかったのですが、教室で40人余りの中で一人ずつ当てられて立って暗誦し、出来た人から大きな聖句カードにスタンプを押してもらいます。ちよつとスリルのある楽しい時間でした。「緑の牧場にふさせ、いこいのみぎわにともないたもう…」子ども心に想像していた豊かな丘の上に広がる土地ではなく、儉しく水も乏しかの地での貴重な緑であろうと大人になって知りました。「たとい我死の陰の谷を歩むとも災いを恐

れじ」は子ども時代も今も強いインパクトを与えてくれます。

中学時代の運動部合宿で毎年礼拝で必ず読まれたのが「患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を…」最近の岸先生のお話でも耳にする箇所ではありませんが、いつも前半に力点が置かれていた記憶があります。山中湖を見下ろすグラウンドで、先輩が司会する真夏の朝でした。

「地の塩、世の光」これは高校のスクールモットーで校舎に掲げてあるので毎日目にしていました。「いつも喜んでいなさい」この聖句は腹話術人形を膝に乗せてくり返し話しかけ、練習していた母の記憶です。

聖句の小さな積み重ねが子どもたちの人間形成に良いものをもたらすという理念に基づいて伝えられたと思います。そして一人ひとり、人が意識するしないに関わらず、御言葉による平和の実現へとつながっていくものと思われまふ。イエス様はこの国で生まれたの？と小さい子どもから問われて答えに窮するような、今の状況が早く良くなつてほしいものです。

伝えたいこと

馬場 茂

この半年で3人のひとを失なった。とても悲しい。男性で91、89、77歳と言えば、まあ平均寿命を超える年齢であるが、最も親しかった人である。いろんな趣味をもった人であった。話し相手が一挙に半分以下になってしまった。うーん、77歳の人はたばこが好きだったが、人前では吸わなかった。

最近の医学の進歩は、科学と比べると二重らせんの構造体は糸巻き状のタンパク質(ヒストン)に巻き付き、それが寄り集まってクロロゾド・クロマチンという状態になっている。すると遺伝子としては働かない。機能するためにはDNAは裸になっていなければならない。ヒストンの端がアセチル化されるとオープンな状態になり、RNAが転写を始めるわけだ。あらゆること、どんな薬が効くのか、わかるようになる。

このプロセスをエピゲノムというのだが、これがDNAではなく環境によって大きく変わることが分かってきた。あらゆる病気を防止する世界になる。私たちは、これまで親は子供を育ててきた。つまり、子供に自分の夢を託した、自然界の掟がなくなっていく。

こんな日はすぐには来ないだろうが、人は2、3回は情熱までに変えないと思う。過去のしがらみがなければ、20年で今までの考え方を変える。昔は、隠居というと表舞台から消え去ったものだが、伊能忠敬も蝦夷地へと出向いた。

聖書にも、2コリント4:16「だから、わたしたちは落胆しません。たとえわたしたちの『外なる人』は衰えていくとしても、わたしたちの『内なる人』は日々新たにされていきます(新共同訳)とある。私は、後期高齢者になつたばかりだ。体力は衰えてきているが、この3人のように何かに興味もちながら、静かに息を引き取りたいと思う。何かに打ち込める人はたとえ認知症になつて家族を忘れても、そのことを忘れることはないと思う。

感謝

樋口史子

「どんなことでも、思い煩うのはやめなさい。何事につけ、感謝を込めて祈りと願いをささげ、求めているものを神に打ち明けなさい」(フィリピ4:6)。

2024年が明けて何を思ったか自分でも定かではないのですが聖書を創世記から読み直そうと考え、毎日1章ずつ読み続けている。今のところ三日坊主にならずに出てくる。いくつもの心打つ御言葉は現在の自分を成り立たせていただいているし、反省もし、努力もしてきたように思う。

特にこのところ、日々「感謝」という御言葉が身にしみて感じている。年令を重ねてきたが故かもしれない。生前、夫とよくケンカになった時も最後は今の自分たちを感謝しようよ、と言って終わらせていたことを思い出す。それで相手が納得していたかは今と違っては確かめようありません。

長い人生の中で窮地に立たされた時もいつも御言葉に導かれ、一歩前へ踏み出せた場面も多々あり、神様に見守られているのだと気付かされ、感謝し祈りもした。

経験からも人に御言葉を伝えるのはタイミング、状況、老若男女という多くの気使いをするので、口に出すのは難しいものです。従って自らが感謝して生きていることをひたすら実践するのみです。孫やお嫁さんに些細なことをしてもらったり教えてくれたり、特にスマホ等の操作を何度聞いてもイヤな顔もせず助けてくれることもしばしば。そんな時も当然、自然に感謝の言葉が口から出ています。かわいいう年寄りになりたいと思っています。

村田牧師の応接室のような教会でいつも笑顔でハグしてくださった懐かしい時代から、四籠牧師、岸牧師へと、何故か自分ばかりすくなく年を取ってしまった錯覚はともかく、日本に居なかつた時も含め、いつも守られてきたことを思い、深く感謝の日々です。

人はパンのみにて生きる者にあらず

三宅浩子

聖書の中で最も好きな言葉は？と問われれば、私は「マタイによる福音書」の4章4節だと答えます。誰もが知っているあの、「人はパンだけで生きるものではなく神の口から出る一つひとつの言葉によつて生きる」の箇所です。

今更説明するまでもないことですが、これはイエスが荒野で悪魔に誘惑された時に、モーセの言葉(申命記8章3節)を引用して言われたものだと思われています。

生きるために食べ物が必要なのはごく当然なことです。しかし人である以上、それだけでは足りません。心の支えも必要なのです。私は留学生に日本語を教えているのですが、先日授業で「推し」の言葉について話し合う機会がありました。人気があったのは、エジソンの「天才とは1%のひらめきと99%の努力である」でした。

経験に裏打ちされた名言は、若者を鼓舞します。

アップル社のジョブズ元会長が米国の某大学でスピーチした際の言葉を挙げる学生もいました。卒業生を激励する「ハングリーであれ。愚か者であれ」は、IT業界のパイオニアとしての矜持に満ちたフレーズです。

中国の古典から引用した人もいました。老子の「千里の道も一歩から」は、地道な努力をいとわぬ人に愛される言葉です。

私はフランスの小説『星の王子さま』中の一節を紹介しました。「心でしかものはよく見えないってことだよ。いちばんたいせつなものは、目には見えななんだ」は、良い言葉だと感じるからです。

前向きなメッセージは人の心を明るくします。それを支えに生きていくことができるのです。

聖書の話に戻りましょう。冒頭に掲げたマタイの4章4節は、主の言葉に耳を傾ける大切さを伝える句であり、キリスト教の本質を端的に言い表しています。この心づもりで、私はこれからも聖書を読んでいこうと思います。

説 教

『語り続けよ』

イザヤ書65章1節～5節
使徒言行録18章1節～11節

岸 俊彦

ギリシャ文明の中心地アテネでは、パウロの伝道は実を結びませんでした。そのためコリントに移動しました。コリントは、ローマ、アレクサンドリアに次ぐローマ帝国第3の一大商業都市でした。様々な人が集まっていました。格差もありました（1コリント1・26）。都会の様々な問題があったに違いありません。

スである」と力強く証しました。しかし、ユダヤ人の反発により会堂から追放されました。パウロの転機です。もっぱら異邦人への伝道へとパウロは舵を切りました。幸いなことに会堂の隣ティティオ・ユストの家が新しい拠点となりました。さらに驚いたことに、会堂長のクリスポ一家がキリスト者となりました。

ました。上手いところが上手いくまいが、これまでと同じことを、倦まず弛まず繰り返しました。礼拝し、伝道し、働き続けました。コリントでの伝道は、パウロ50才過ぎの頃です。ダマスコの途上で復活のキリストと出会い回心して20年以上が経っていました。「50にして天命を知る」に倣うなら、神が与えてくださった天命を、パウロは知りました。それは「メシア、救い主はイエスである」という信仰です。パウロにとって、アキラとプリスキラ夫妻にとって、シラスとテモテにとって、コリントの人たちにとって、そして私たちにとって、なくてはならないただ一つのことです。

パウロは、ユダヤ人会堂で反抗され、口汚くののしられました。しかし、十字架のキリストを信じる者は必ず生まれます。それは、神の力によって生まれるのです。神は生きて働いてくださっています。私たちは神の力を信じればよいのです。

最後に実現するのは御心です。人の心には多くの計らいや願いや夢があるでしょう。しかし、主の御旨のみが実現するのです。そのことを信じているならば、自分にこだわらず、この世にこだわらず、御心によって自らを切り替えられます。黙々と礼拝し、働き、伝道していたら、何が御心かはつきりと分かる時がきます。人との出会い、試練を経て、それぞれの人生を導いてくださる主に感謝する時がきます。収穫の時がきます。

神の時が満ちるまで、諦めることなく、くさることなく、共に目を覚まし、祈りつつ、悔い改めつつ、礼拝し、自らの手で働き、黙々と主イエスを伝道するのです。

「恐れるな。語り続けよ。黙っているな。私はあなたと共にいる」（使徒18・9、10）。

黒海沿岸のポントス州出身のアキラとプリスキラというユダヤ人キリスト者夫妻が既にコリントにいました。49年クラウディウス帝がユダヤ人をローマから追放したためです。パウロとこの夫婦は、テント造りを生業とする同業者でした。ユダヤ人の会堂を拠点に、共に働き、伝道しました。そこにマケドニアの諸教会の献金を携えたシラスとテモテが加わりました。そのためパウロは伝道に打ち込むことができ、「メシアはイエ

大都会コリントで、ローマから追放された者とアテネから逃走した者が会いました。さらに思いがけない仲間が加わりました。「目が見もせず、耳が聞きもせず、人の心に思い浮かびもしなかったことを、神はご自分を愛する者たちに準備された」（1コリント2・9）。

パウロは、アテネでの失敗を糧に、コリントで新しいことを始めたのではありません。「安息日ごとに会堂で論じ、ユダヤ人やギリシア人の説得に努め」（使徒18・4）

追悼

愛するおふくろ

故・
村田徳子姉

母の徳子は、3月22日夜の7時過ぎに長年住み慣れた自宅で、姉の寛子と自分が見守る中、スーッと眠るように亡くなりました。いつものおふくろの穏やかな表情でした。

17日の日曜日は久しぶりに家族親戚8人が集まり、2日後に96歳を迎える前祝いをしました。みんなで食事をした後、大好きなチョコレートケーキのロウソクの火を元気に吹き消していました。今思えば、願ったのは晩年口癖のように言っていた「そろそろ、パパのところにいきたい」だったような。一度だけおふくろに怒られたことがあります。自分が小学3年生でストックホルムに住んでいた頃、おやじが出張の度に買ってくる煙草を書斎から持ち出し、隠れて吸っていたのが見つかったから

です。家の近くの湖へ連れていかれ、「今までこのように育てたつもりはありません、入水します」と言われ、大泣きしながら謝りました。おふくろの顔が怖かった。

おふくろには生前愛していたことが2つあります。1つは経堂北教会。ライブ配信で礼拝を守ることが多くなっていました。2つは教会活動のことを気に掛けていました。もう1つは家族や親戚のこと。自分がおふくろに愚痴を言う度に返ってくる言葉は「互いに愛し合いなさい」の一言でした。

たくさん泣きました。おふくろお疲れ様。いつも会いたいと言っていた親父をはじめ、村田のおじいちゃん、林の叔母ちゃんとは再会出来ましたか？ 親父に、あれやってくれ、これやってくれと言われているませんか？ 親父に出来ることはやらせて、穏やかに過ごしてください。こちらにいる家族、親戚、家のことは、頼りないけれど健がこれからも笑顔でみんなと仲良くやっていきますので見守っててください。ただ、道に迷った時は叱咤激励の言葉をください。心からありがとう。(村田健)

西南支区役員研修会報告

3月20日、鳥居坂教会で西南支区役員研修会がありました。「コロナ禍からその先へ」という主題で、牧師・信徒合わせて45名が集まりました。開会礼拝の後、アンケート報告、ベテル教会、鳥居坂教会、松原教会からの報告がされました。コロナの影響を聞くアンケートには西南支区42教会のうち40の教会からの回答があり、その集計結果が報告されました。

経堂北教会と同様に高齢化や会員数の減少による財政面の問題などを抱える所も少なくないようです。また牧師急逝後の代務者確保が課題になっているなど、礼拝を捧げることもそのものが困難になっている教会もあるなど、深刻な問題も報告され、支区の教会同士の繋がりの重要性を感じました。鳥居坂教会では婦人会を解散して、今まで担っていた活動を教会全体で、といった報告もありました。

この研修会の一番の恵みはグループトークの時間でした。私は経堂北教会で長老になるまで西南支区の他教会のことなど全く知らず、特に関心もありませんでした。しかし、一昨年度西南支区の常任委員に選出され毎月の常任委員会に出席することで、他教会に目を向けさせられるようになりました。今回のグループトークは、支区の他教会の様子を詳しく伺うよい機会となりました。8名程度の6つのグループに分かれて食事をとりながらそれぞれ自分の所属する教会の様子を話しました。私といったグループは聖ヶ丘、霊南坂、世田谷平安、用賀、鳥居坂、麻布南部坂の各教会の信徒が集まり、コロナ対応からその後に向けての取り組みや様々な教会活動の様子などを話し合い、交流しました。来年度経堂北教会にお迎えする松谷祐二先生の牧する麻布南部坂教会の大司宣子さんと同じグループになったのも何かのご縁でしょうか。来年度以降も何か繋がりをもちたいと思わせられました。コロナ禍後のこれから、神様を礼拝する者として経堂北教会の中での交わりを大切にしていけるとともに地域の教会との関わり、交わりを豊かにしていきたいと感じさせる会となりました。(大友太郎)

墓前礼拝報告

3月31日、午前7時半から生田の春秋苑で5年ぶりのイースター墓前礼拝が行われました。出席者は23人でした。初夏のような暖かい朝で、ウグイスの鳴き声に迎えられ、開始前、「今日は良いお天気になってよかったわね！でも春秋苑の桜は今年はまだみたいね」などと会話が弾みました。笑顔を見て、皆さんがこの墓前礼拝の再開を待ち望んでいたことがとてもよくわかりました。

この日私は、弟夫婦と、ニューヨークから戻って来ていた姪、そして私たち夫婦の家族5人で参加することが出来ました。母を亡くしたばかりで、まだまだ深い悲しみと寂しさの中にあり、優しい声を掛けられる度に涙を堪えるのが必死でした。そんな私でしたが、「大丈夫、ママはもう神様の元にいるのだから」と自分に言い聞かせながら、一生懸命讃美歌を歌い、「主の祈り」を祈り、聖書の言葉に耳を傾けました。

岸先生が説教で「キリストが生きておられることを信じることで

できるのは、目の前に主が現れてくださるからではありません。主の御言葉を思い出すことです。御言葉に聞いてこそ、キリストが死者の中から復活され、今も生きて働いてくださることが信じられるのです」と語ってくださいました。続けて「亡くなった方のメモ書きされた言葉によって、故人が今も生きてるように語りかけるように思えるのです」と話されました。前の週に母を天国に送ったばかりの家族にとつて、岸先生のメッセージはとても大きな慰めとなりました。キリストは復活された、そして今も生きて働いてくださる、ということの意味を、いつか家族みんなで理解する日が来ますようにと祈りました。(沢田寛子)

長老のファイル

新年度が始まり早1ヶ月。この『栄光』がお手元に届く時には総会も終わり、新たな体制が決まっているでしょう。長老会ではこの2ヶ月、総会に向けて昨年度の活動の振り返りと反省、新しい年度の計画について話し合いを重ねました。コロナが5類に移行したことで、4月からはマスク・消毒も任意になり、食事を伴う行事の再開はまだ未定ですが、通常の姿での教会活動が戻りつつあります。

総会資料を通して、マスク生活の中ではありますが、活動の幅を広げてきたことが読み取れます。キリスト教入門講座、教会学校の夏のキャンプ、聖歌隊の奉唱の再開、青年会の修養会が出来たことはうれしい前進でした。インマヌエル会、ナオミ会も着実に学びの時、信仰による交わりの時を続けています。ルデヤ会、図書委員会も少ない頻度ではありますが集まりを持つことが出来ました。

コロナ禍前と同じような形とはいきませんが、模索をしながら教

会活動を広げようとしています。困難な中でも礼拝・祈禱会などを守り続けることが出来た恵み、主のお守りとお導きを感謝します。

松谷祐二先生の招聘が決まり、岸先生の最後の年度。一つひとつの礼拝・行事が岸先生の集大成、大切な1年です。長山道先生をはじめ今までお世話になった先生方、この教会で研鑽を積み築いた先生方をお招きしての礼拝・懇談を通してこれからの教会の歩みのためのヒント、力をいただくこうとしています。良い形で引き継いでいけるように教会規則、牧師館をはじめとする設備、様々なものを整理して、目に見える形で変化を感じる1年になるでしょう。

普段の教会生活の中では当たり前のように思っ過ぎてきた事柄も、岸先生ご夫妻が担い、積み重ねてくださったことで成り立ってきたものが沢山あり、それらを私たちが全て把握できていないことを心細く感じてもいますが、今迄の岸先生ご夫妻のお働きを感謝し、主のお導きを信じて皆様と祈りを合せて乗り越えていきたいと思えます。(小嶋幸子)

牧師の書齋から

初めて教会総会資料に関わったのは1983年、伝道師に就任してからでした。タイプ打ちのポールペン原紙の校正でした。上北沢にあった杉並孔版に昼から詰めました。夕食は近くでカツ丼を食べました。それから杉並孔版には毎週土曜日午後、週報の校正に通いました。月に一度『栄光』の校正にも出かけました。

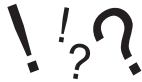
なり、ファックスでやり取りするようになりました。ただし総会資料は手書き原稿を和文タイプで入力してもらっていました。3月の終わり、その頃は高校生たちと合宿していました。手書き原稿を持ち込んで編集しようと思ったのですが、一度も手を付けることはなく、東になった原稿用紙を持ち帰るだけでした。

で借りました。それがパソコン入力となり、原稿はほとんどメールで届くようになりました。それでも当初は、プリントアウトした原稿を印刷所に持ち込みました。最初持ち込んだ印刷所は都心の大門でした。家賃の関係から府中へと移りました。1年に一度ですが、原稿を持ち込んで打合せながら四方山話をしました。20年以上の付き合いです。今は札幌に移りました。こちらもデータで送ります。月曜日午前中に送信すると、金曜日午前中には

宅配便で総会資料が届きます。打合せもメールで済みます。今回が最後ということ、「来年3月末で定年です。お世話になりました」とメールに一言添えましました。そうしたらわざわざ電話がかかってきて、「こちらこそ優しくしていただいて!?!ありがとうございます。お元気で」と言われました。

色々な業者との付き合いがありました。長く続いた業者は、ただ仕事とお金と言うことではありませんでした。(岸 俊彦)

個人消息



掲示板



- 子どもの日合同礼拝
5月12日(日) 午前10:15
- 聖霊降臨日 5月19日(日)
- 東京教区総会
5月28日(火)～29日(水) 於 富士見町教会
- 聖霊降臨節第3主日礼拝
6月2日(日) 午前10:15
説教 上野峻一教師
- 初夏の集い 6月23日(日)
説教 片岡宝子牧師 講演 片岡賢蔵牧師

編集後記



▽私が伝えたい御言葉は「いつも喜んでいなさい。絶えず祈りなさい。どんなことにも感謝しなさい」(1テサロニケ5:16)です。全く実践できていないのですが、こうありたいと思っています。(酒井)

「栄光」2024年5月号
日本基督教団 経堂北教会
〒156-0051 東京都世田谷区宮坂3-21-11
電話：03-3428-5029 / FAX：03-3428-5038
牧師：岸 俊彦
編集：栄光編集委員会
Email：kyodon@nifty.com
HP：http://kyodokita.life.coocan.jp